

全国歴史教育研究協議会第 57 回研究大会（埼玉大会）報告（世界史）

神奈川工業高校 中山拓憲

はじめに

今回の報告では、日本史教員の視点から見た報告と、世界史教員の視点から見た報告をそれぞれ載せることになった。今大会は 7 月 27 日（水）～29 日（金）まで「歴史的思考力をどう育成するか」というテーマで、埼玉県浦和コミュニティーセンターにて行われた。分科会は、第 1（小中高連携）、第 2（日本史前近代）、第 3（近現代日世合同）、第 4（世界史）、第 5（博学連携）の各分科会が開催された。私は世界史の第 4 分科会に参加したので、その報告を中心に行う。

第 4 分科会の報告

第 4 分科会のテーマは「歴史的思考力を育む授業及び考査・評価のあり方を考える」であった。提案は①近藤隆行（越谷）「アイヒマンを巡る問題―「凡庸な悪」を問う―」②青木美智留（松山）「東大の入試問題を利用したジグソー法」③藤本和哉（筑波大附属）「知識偏重からの脱却―授業及び定期考査における資料の扱い方を中心に」というテーマで行われた。

①はナチ党でユダヤ人の強制収容所移送を担当していたが、戦後逃亡した後、1960 年に逮捕され絞首刑に処されたアイヒマンという人物についての実践である。定期考査で彼が有罪か無罪かを判断する論述問題を出題した。アイヒマンに同情的な生徒が少なくないことに驚いたと報告者は発言していた。②は東京大学入試の 600 字論述問題を、ジグソー法で解くという授業実践の報告であった。150 字ずつ担当するグループをつくり、それを組み合わせて 600 字にまとめるというものであった。東大入試でも解けるということを実感させたかったとのことであった。③の報告は、授業・提出物だけでなくテストでも思考させる問題を出題するという実践であった。世界史で、授業においてアクティブ・ラーニングを行うが、テストは普通の暗記問題というのはよくあることである。既習のものは 2～3 割程度しか出題せず、残りの問題は初見の資料を見て、問いに答える。授業で思考の練習を繰り返さないと、テストも解けない。これらを通して「世界史は暗記科目だというイメージ」を払拭し、さらには「詳しく学ぶ歴史をやりたい」なら日本史、「総合的かつ構造的に歴史を学びたい」なら世界史という住み分けをして、世界史選択者を維持したいと話した。この実践が最も印象に残った。最後に指導助言者の東洋大学の中世ヨーロッパ専門の鈴木道也先生からの話があった。歴史的な概念の問題を出題すると、史学科生は知識が邪魔をして、他学科の学生よりも間違えることが多かったりすると、知識偏重教育の弊害について述べた。以上が第 4 分科会の報告である。

全体会報告～おわりに

全体会では歴史的思考力の現状、育成の試み、いかに評価するか等の報告がそれぞれ行われた。大会全体を通して、歴史的思考力について、様々な報告が行われた。ただし私も含めて、それらの実践が、歴史という授業の中で行われる思考力育成型の授業なのか、歴史的思考力を育成するための授業なのかの区別は難しいと感じられた。また歴史的思考力に対して統一的な定義が求められているのか、またはさまざまな歴史的思考力があっていいのかも決めがたいと感じた。私も、他の教員と歴史的思考力について議論を深めて、還元できることがあれば還元したいと感じた大会であった。